

【45】歩道の敷石

東京のことですが、昭和40年代（1970年前後）当時、左翼とくに学生のデモ隊が、都心や新宿の繁華街などの街頭で、警備の機動隊と乱闘をくり返していました。

この時、デモ隊の"武器"になったのが、道路の歩道の敷石のコンクリート板を砕いたコンクリートのカケラで、これを機動隊に投げつけるので、商店のショーウィンドウが壊されたり通行人が怪我をしたりすることが頻発しました。

当時、道路は車道はアスファルト舗装だったのですが、歩道は土の路床の上に一辺 30cm ほどの正方形、厚さ 5cm くらいのコンクリートの平板を敷きつめた敷石構造になっていました。

とくに目地は無く、隣りあった平板の境目から雨水が下の砂地に浸透し、歩道に水が溜まる事は有りませんでした。

沿道の建物への水道、ガス管の工事もコンクリート板をはがして工事を行い、終わったら埋め戻して砂地をならしコンクリート板を並べ直しておけば良いので、事は簡単で、今考えても優れた構造だと思います。

しかし、不幸にもこのコンクリート敷石が悪いわけでもないのに、警備当局からの要請もあり、目ぼしい地区の歩道から撤去されることになります。そのあとはアスファルトの簡易舗装です。

デモ隊のコース予定がわかると（警察に届けが提出される）コースの歩道のコンクリート板を一夜でアスファルト舗装に変える工事が行われたこともあったようです。

その後、街頭での暴力デモは無くなったにもかかわらず、歩道の敷石舗装の変更は続けられ、東京中の歩道はアスファルト舗装で黒っぽくなりました。

進歩したことは、同じアスファルト舗装でも雨水を浸透させる透水性舗装が増えてきたことでしょう。

しかし黒いアスファルト舗装はあまりにも殺風景なので、流石に繁華街、商業地区、ビジネス街そして駅前など人通りの多いところの歩道は、レンガ状のカラーブロック、人造の石板、銀座通りや東京駅前では天然の石板等で舗装されていますが、全体からするとまだまだ不十分です。